

竜年を迎えた飼料対策

今年は竜年です。

竜は神話中で怪物で、頭に角・牙、頸の下に玉を持ち、らんらんたる巨眼、鋭い爪のある四足、大きな鱗を備えた長蛇の姿、深淵に住み、雲に乗って天に昇り、稻妻を発する。

古人が竜巻きから想像したものであろうか、祥瑞のしるし、龍虎争うとか、竜頭蛇尾の言葉のように強い者の象徴でもあります。

竜神は農耕にもむすびつき、雲・雨・水を司る神として信仰されていますから、今年の好天気を竜神に祈りたい思いで一杯です。

しかし、世界的な異状気象、人口爆発そして食糧危機、東西対立がもたらす社会と政局不安、資源・通貨にからまる経済乱氣流、加うるに過密から来る公害・環境汚染——今年はどのような道を歩むのか、竜神といえども見透しかねる世相と言えましょう。

コンピューターを駆使して月世界に立った人類の英知を以てすれば、解決出来ないことはないと思われますが、今や物質より心の問題が、人類自身のために最も大事な事となって来たようです。

その人類の生命を支える食糧一穀物も、海洋資源も、不足になって来ました。

農業に携わるものとして、どうすればよいのでしょうか？

世界の食糧不足の中で米の生産調整をしている日本の農業、大量の穀物を輸入して営んでいる日本の畜産、蜜柑を摘果して減産している傍でオレンジ、グレープフルーツ、たまねぎからコンニャク玉まで輸入している日本の園芸……。

世界を一つと思えば、さしたることもないが、もう一つ工夫が必要と思われます。

今や、稲作とならんで、日本農業の大きな柱となった畜産。それには自給飼料増産の工夫こそ、竜年の最大課題と言えましょう。

1 自給飼料の3割増産

近年、わが国の大畜経営は、規模の拡大もあって濃厚飼料への依存度が高まって来ました。然も、最近の世界的な飼料原料の不足と高騰が重複して、大畜経営を大きく圧迫していますが、国際的な穀物事情に左右されない解決法は、自給飼料の増産が急務であるといえましょう。

そして、この自給飼料増産の目標は、大畜の本来の必要量と日本の現在の自給度とを考えますと、**3割増産**が絶対必要であり、増産の可能性があるのです。

乳牛飼料に於ける粗飼料（概ね自給）割合の推移

	濃厚飼料	粗飼料	その他	備	考
昭和35年	39.5%	60.2%	0.3%	定着期？	(1戸平均 2.0頭)
昭和46年	45.9%	53.3%	0.8%	拡大期	(1戸平均 6.0頭)
現在(49年)	—	—	—	充実期？	(1戸平均 9.8頭)

現時点の自給度は不明ですが、飼料作物の作付動向をみると前年対比面積で昭和43年107%，44年104%，45年109%，46年112%と平均10%近い伸びを示したのが、47年以降は2~3%の伸びに停滞していることからみて昭和46年より更に低下が予想されます。

これでは畜産の進展につながりません。足りない分を飼料穀物で補うより、自給飼料の増産で補いたいものです。

2 自給飼料増産の場

国の補助、奨励施策の中でみても広い分野に存在しています。

(1) 新規の草地造成による外延拡大での増産

- イ) 草地開発事業 国営、道府県営、団体営、公社牧場、草地整備、基盤整備事業等
- ロ) 農用地開発事業 国営、道府県営、団体営事業中の草地造成
- ハ) 広域農業開発事業 根室中部新酪事業等
- ニ) 畜産基地建設事業 福島県麓山地区、島根県石見地区、北海道大雪地区等

(2) 既耕地の活用による内延拡大で増産

- イ) 緊急粗飼料増産総合対策事業
 - A) 水田裏作への飼料作物の作付
 - B) 水田裏作への飼料麦の作付
 - 飼料穀実(グレーン)、又はホールクロップサイレージ材料の生産
 - 水田の裏作作付率は10%以下で、裏作不適地の北海道を除いてもなお裏作不作付地が250万haがあり、この場の活用をもっと工夫することです。
- ロ) 稲ワラ飼料化推進事業

飼料としての良質セルローズ源である稻ワラの飼料利用率は僅かに16%，敷料、加工、堆肥用が57%で、残りの約30%は焼却されているので、この資源を活用しようとするものです。

- ハ) 飼料作物生産振興対策事業
 - A) 既耕地に於ける飼料作物の生産奨励 一定規模以上の飼料作物の集団の栽培へ奨励金も交付されます。
 - B) 既耕地での飼料用麦の生産振興対策 これにも奨励金が交付されます。

ニ) 農業構造改善事業

水田総合利用対策事業での飼料作(稻転)も昭和53年まで継続延期されました。

このように増産の場は充分にあり、積極的に推進するならば3割増産どころか倍増も充分可能で国土(土地)の狭さを憂うる前に足下を見つめ

たいものです。これらの補助・奨励事業での飼料作物栽培は何れも高収量、高栄養を得るために各地域に適応した優良(奨励)品種(末表参照)の利用が義務づけられています。

3 自給飼料増産の方向

(1) 草地

○高栄養、高収量草地の造成 最近の混播はマメ科の利用率が低下傾向にあり、これが低収となる原因で、更に栄養的にも問題が多く、特に牧草利用で増加傾向にある産前、産後の起立不能症や、グラステタニーもマメ科の少ない草地に発生しやすいので、播種量の30~40%はマメ科を混入し、高収量、高栄養草地を造成したいものです。

○利用目的に応じた草地 兼用型草地を一部分にして採草(長草型牧草主体)、放牧(短草型を主体にして季節生産性を均一化)専用草地を造成することが、多収と利用効率の向上になります。更に採草地は刈取適期の異なる早、中、晩草地をもつことが、個々の草地はもとより、粗飼料流通用のヘイキューブ用草地では必要です。

○老朽化草地の早期更新 老朽化草地は低生産草地である上に、栄養低下、不健康草、肥料効率の低下、冬枯れ発生等、数々のマイナス面を包蔵しています。これを適期に更新すれば、更新経費は新規造成の2分の1以下で、即刻2倍以上の良質草を収かくすることができます。

(2) 水田裏作

適応性の広い、省力栽培向きのイタリアンライグラスが裏作飼料作の大宗となっていますが、多雪地帯ではまだまだ不安定です。積雪日数100日を超える、更に寒気のきびしい北陸や東北の日本海側や東北北部では安定作物として、テトリライト(H.ワンライグラスの四倍体)が作出されました。テトリライトを主体として、これに一部イタリアンライ、ライ麦を混播することによって多雪地帯でも安定多収裏作が実現します。

(3) 暖地での多毛作飼料栽培

組合せによって2~3毛作で青草10a当たり20tとなりが可能です。この場合は、生育の早い冬

作イタリアン、えんばくに、夏作としてデントコーン、ソルゴー、シコクビエ、あるいは下総かぶ、家畜ビートを組合せます。

(4) 耐暑性牧草の活用

暖地での乾草づくりに耐暑性牧草—ローズグラス、グリーンパニックなどの栽培を工夫することです。真夏の高温期に良く生育し、良い乾草を容易につくることが出来て、乳量や無脂固型分の増加に役立ちます。

(5) F₁ デントコーンの利用

デントコーンの改良がすすみ、各熟期の、よく揃った、実つきの良い、然も耐病、耐風性のF₁が出現しています。特にサイレージ用のとうもろこしは、子実生産の多いもので、黄熟若しくは完熟期収かくとしたいものです。僅か10～15日の刈急ぎで栄養生産量が半減します。要は水分ではなく栄養であり、乾物量を増産するための栽培です。

(6) 稲転草地

昭和50年で中止される予定であった稲転が

新に水田総合利用対策として、さらに飼料栽培が3年延長となりました。

牧草栽培は50年までを目途に造成しておりますが、水田土壤の特性から草地としての利用限界にきております。更新によって一層畑地化が促進され、高収量草地が期待できます。

(7) イナワラの利用促進役としてのかぶの周年栽培

イナワラの良質セローズを飼料として利用する促進役（パートナー）は飼料用かぶです。

栄養的にみると、

稻ワラ 0.5 kg + 生かぶ（葉と根部）2.0 kg = 乾燥ビートパルプ 1.0 kg

となります。作りやすく、早春まきは抽苔の心配のない紫丸かぶで、其後は小岩井、下総の多収種で、周年栽培、周年利用が可能です。

地域に応じて、頭数に応じて、これらのことと組合わせ、この竜年の飼料対策としたいものです。

（札幌研究農場長 三浦悟楼）

〈事業所移転〉

東北支店

東北における営業は盛岡支店で行なって参りましたが、営業と工場を一体化し、業務の能率化、お客様へのサービスを強化するため、盛岡支店を岩手県北上市にある北上工場敷地内に移し、名称を『東北支店』として営業業務を進めることにいたしましたので、よろしくお願ひいたします。

東北支店の業務は、昭和51年1月1日から開始します。

東北支店

住 所 岩手県北上市飯豊町字村崎野第14
地割 174 の 1
電 話 (01976) 6-2226 (代)

帯広営業所

北海道帯広市所在の帯広営業所を移転し、種子・飼料倉庫を併設して、皆様の便宜を図ることとしました。昭和50年12月10日より下記により業務を開始致しました。尚電話が代表番号となりましたのでよろしくお願いします。

新住所 帯広市西23条北1丁目15番地の34
電 話 代表 (0155)-37-5151